

授 業 実 践 開 発 研 究

第 6 卷

2013 年 3 月

千葉大学教育学部授業実践開発研究室

「現代(の)音楽」に親しむ鑑賞授業の開発と実践 —SNS を活用した作曲家とのコミュニケーションを扱って—

飯島 淳

NPO 法人企業教育研究会研究員、公立中学校音楽科講師

本稿は、現代の純音楽を鑑賞教材とした中学校の音楽科授業の開発とその実践に基づいた論文である。21 世紀に入って 10 年以上が経過したが、その間に作曲された純音楽の中には、音楽それ自体の魅力のみならず、特殊楽器や特殊奏法によって生まれる「多様な音響」、独特の楽器編成や配置によって演出される「見た目」、作曲技法や作曲過程の「エピソード」までを含めて鑑賞することで、生徒の興味関心を高められる作品がある。そこで、生徒が作品や作曲家に親しみをもちながら主体的に鑑賞できる授業を開発するために着目したのが、30 代にして世界の著名なオーケストラや演奏家から次々と作品を委嘱され続けている気鋭の作曲家、藤倉大 (1977-) である。授業開発においては SNS を積極的に活用し、その構想段階から藤倉氏とコミュニケーションを取りながら進めることができた。これらの新規性を示すために、授業開発までのその経緯と過程についても明記した。

キーワード：音楽科教育、鑑賞、現代音楽、作曲、藤倉大、SNS (Twitter、Facebook)

1. はじめに

2011 年 4 月から 2012 年 3 月までの 1 年間、筆者が音楽の授業を担当した中学校では、2・3 学年の年間指導計画の目標を、「多様な音楽や音響に対する興味関心を喚起しながら、生徒の音楽観を拡張すること」とした。前期には、机や椅子、バケツやゴミ箱など楽器ではない身近な「モノ」を打楽器として活用するリズムアンサンブル「STOMP」や、テーマに沿って様々な音響を組み合わせる「音響風景づくり」(Soundscape)¹などを実施した。これらは 20 世紀後期に考案・提唱された音楽表現活動であり、実践している中学校も少なくない。

しかし、鑑賞の授業においては、教科書や副読本に掲載されている作品のほとんどが西洋の古典(クラシック)音楽であり、20 世紀後期以降に作曲された純音楽²を題材・教材として取り上げた授業の実践となると、表現活動に比べて圧倒的に少ない。³そこで、現代の純音楽が中学校の音楽科教育において敬遠されている要因が、鑑賞教材としての「扱い方」にあるという視座から、生徒が親しみをもち主体的に鑑賞できる授業づくりの在り方を再考し、実践したいと考えるに至った。

2. 中学校音楽科教育における「現代音楽」

そもそも「現代音楽」とはどのような音楽だろうか。『大辞林』(三省堂)によれば、「一般には、第一次大戦以後の芸術音楽をさす語。広義には、ドビュッシー以後の二〇世紀の音楽全体、狭義には第二次大戦後のさまざまな新しい傾向の芸術音楽をさす」とされている。しかし、この解釈では 100 年前の作品も 1 年前の作品も同じ「現代音楽」として分類できてしまう。また、「現代音楽」に限らず古典(クラシック)音楽においても、知名度や作曲者の名声が高い作品には、年月が経過するほどに様々な解釈や批評、分析がなされている。そのため、「どのような」教材を選択し、授業として「どこまで」を「どのように」扱えば良いかを吟味する必要がある。

教材研究によって教師は視聴覚資料や楽譜、文献などから様々な知識や情報(作品の解説や批評、音楽史における位置づけ、作曲者についてなど)を得るわけだが、それらを生徒にそのまま伝達するだけの授業にならないよう留意すべきである。したがって、10 代前半の生徒たちが授業で取り上げる作品に親しみをもち主体的に鑑賞することができる授業を実施するためには、教材とする作品を吟味して選定すること以上に、その「扱い方」を十分に検討することが求められる。

2.1. 20 世紀の「現代音楽」を扱った先行授業

中学校の音楽科教育でも「現代音楽」を題材や教材として取り上げた表現ならびに鑑賞の授業は、いくつか実践されている。鑑賞教材として有名なのは武満徹(1930

Jun IJIMA : Developing and Practicing of Teaching Program for Appreciating "Contemporary Music"
-Utilizing SNS in order to Communicate with The Composer-
Researcher of the Association of Corporation and Education, Music Teacher at a Public Junior High School
MAIL : musicjun@live.jp

ー1996) 作曲の《ノヴェンバー・ステップス》⁴である。筆者が中学生の頃この作品は教科書に掲載されており、今日でも副読本⁵には必ず掲載されている。また、20世紀後半の音楽や音楽家に革命的な影響を与え、2012年に生誕100年を迎えた米国の作曲家ジョン・ケージ(1912ー1992)の実験的な作品を教材として扱った授業の実践も少なくない。たとえば、ケージの作品に顕著に見られる「偶然性の音楽」⁶を応用した創造的音楽づくりや、後述する《4分33秒》(1952)を教材とした鑑賞の授業などが挙げられる。⁷

具体的な事例として、森下・吉村 他(2007)は、ケージの作品を教材として取り上げた理由について、「現代音楽の作曲家の中でも比較的好く知られており、独特の作風や、生涯を通して音楽に対して真摯に取り組んでいるという彼自身の生き様に對し、子どもたちが興味をもつのではないかと考えた。(中略) ケージの音楽に対する考え方やその作品に触れることが、「子どもたちが考えている“音楽”への認識の幅を広げる」ことにつながっているのではないかと考えた」⁸と述べている。

この視座は、筆者がケージの作品を補助教材として扱う理由とおおむね重なる。ただし、これらの先行研究や授業実践は、すべて20世紀に作曲された音楽や音楽家にフォーカスしたものであり、21世紀に入ってから作曲された純音楽作品や、その作曲家を取り上げたものは管見の限り見つからなかった。

2.2. 21世紀の純音楽を扱う授業の構想

現代(=21世紀)の純音楽を扱う授業を構想したきっかけは、30代にして多数の作曲賞を受賞し、世界中のオーケストラや演奏家から次々と作品を委嘱され続けている気鋭の作曲家、藤倉大⁹(1977-)を知ったことである。音楽家の坂本龍一(1952-)も、「40年近く前、「現代音楽」にはもう可能性はないと思いますむ道を変えました。それからずいぶん時間が経ちましたが、まだまだおもしろい音があったのだ、といううれしい驚きをもって藤倉大さんの音楽を聴いています」¹⁰と注目している。また、TBSの人気番組『情熱大陸』も2010年2月21日の放送回で藤倉氏を特集した。

『情熱大陸』は約25分のドキュメンタリー番組だが、藤倉氏が21世紀に入ってから作曲した純音楽作品の紹介と共に、作曲家としての藤倉氏本人にもフォーカスが当てられている。明るくユニークな人柄で、作曲への真摯な想いと覚悟をもちながら、心から音楽を楽しんでいる藤倉氏の姿。そして、作曲の過程や作曲家のライフスタイルといった「音楽」を取り巻く舞台裏については、教科書や音楽科教育の視聴覚教材からは学べない。また、番組内で藤倉氏が語っている「全ての音楽はその時の現代音楽だった(中略)ですから今「古典」と言われるも

のも当時は現代音楽だった」¹¹という話も、「現代音楽」を知らないがゆえに先入観や偏見を抱く前の中学生にこそ伝えておきたい大切なことだと感じた。この番組を視聴してすぐに思いついた授業の構想が【図1】である。

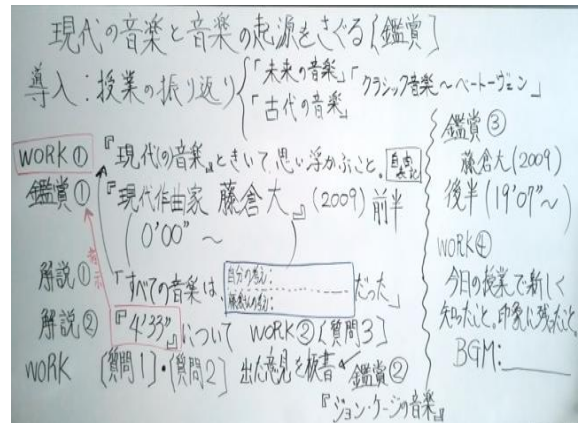


図1 授業の構想 (初案)

2.3. 21世紀の純音楽と作曲家を扱う授業の学習効果

授業を構想しながら、現代(=21世紀)に作曲された純音楽とその作曲家を授業で扱うことで得られる学習効果について考えた。

第1に、20世紀後期から21世紀にかけて、様々な作曲技法や既成楽器の特殊奏法、エクリチュール(記譜法)が開発され、コンピュータや民族楽器を積極的に活用した音楽が作曲されるようになった。これらの作品は、主な鑑賞教材として教科書で取り上げられている20世紀中頃までのヨーロッパ音楽にはみられない楽器編成や空間配置、特殊奏法や電子機器によってマニピュレート(操作)された音響・音色などが取り入れられている。このような新たな要素が盛り込まれた作品を教材とすることで、生徒の音楽観(音楽の捉え方)を拡張できる。

第2に、3-2で後述するアンケート調査において、作曲家に対して抱いているイメージなどを問い掛けたところ、教科書に掲載されているオーケストラ(管弦楽)作品を作曲した西洋の作曲家の印象が強くみられた。また、オーケストラ編成の作品に対して「厳格で難しい音楽」「背筋を伸ばして聴く音楽」という印象を抱いている生徒も少なくなかった。そこで、21世紀の同時代を生きる作曲家のライフスタイルや、作曲の過程を学ぶことで、親しみをもって主体的に現代の純音楽作品を鑑賞するきっかけをつくることできる。

これらに加え、現代(=21世紀)の純音楽と作曲家を教材に選んだからこそ得られた新規性として、「SNSを通じた作曲家とのコミュニケーションを扱った授業」という点を挙げておきたい。

3. 授業開発

3.1. SNS を活用した教材研究

鑑賞教材として選んだ『情熱大陸』は約 25 分の番組であり 50 分の授業で扱うには長すぎる。そこで、いくつかの場面を抜粋して使うために、先駆けて藤倉氏に『情熱大陸』の番組内で放映された作品や演奏法、作曲技法などに関する感想や質問を Twitter で伺ってみた。すると、幸運にも本人から Reply (返事) が届き、作品や演奏法についての解説やカットされてしまったシーンのエピソードなど興味深い話を本人から教わりながら、教材として 4 つのシーンを選択することができた。

1 シーン目に選んだのは、番組の序盤で作曲に使うピアノをロンドンの道端のジャンク・ショップで見つけた藤倉氏が、それを拾ってきたという場面である。ピアノの値段は 2 万円で、弦が切れていたり、弾くたびに自分で調律している姿からは、数々の世界的な作曲賞を受賞し、オーケストラや音楽家からの委嘱が絶えない作曲家の飾らない素顔が映し出されている。授業開発を始めたのは 2011 年 7 月であり、番組の放送 (2010 年 2 月) からは時間が経過していたが、この場面を視聴した率直な感想を Twitter で伝えると、意外な Reply が届いた。

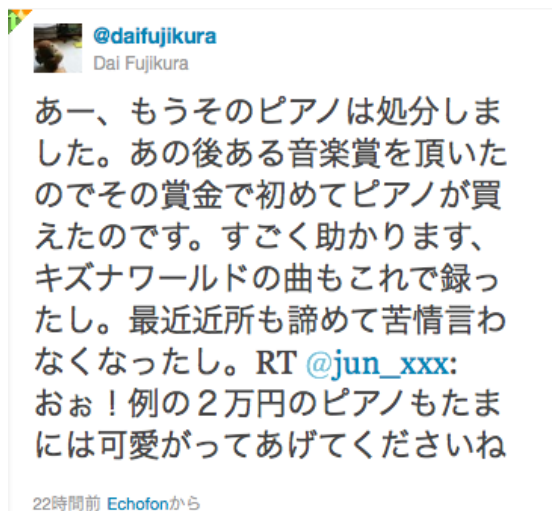


図 2 Reply①

このエピソードは、番組や藤倉氏に対する生徒の関心を惹きつける授業の導入として適していると考えた。また、藤倉氏が Twitter でこの新しいピアノの画像を掲載してくれたので、図 2 と共に紹介することにした。

2 シーン目は、藤倉氏の作品《Secret Forest》(2008) が演奏される場面である。この作品は、オーケストラの楽器 (なお、バスーンは単音楽器でありながら複数の音

を同時に発生させる重音奏法が使われる)と一緒に複数のレインスティックがサラウンドに奏でられるなど、特殊な楽器や奏法も使われており、前期に実施した「音響風景づくり」(Soundscape) を大幅に音楽的にした作品とも捉えられる。また、客席内にも演奏者が配置され、指揮者もステージと客席を何度も振り返りながら指揮を振るといったユニークな「仕掛け」が随所に見られるなど、生徒の興味や想像力を駆り立てやすい作品である。藤倉氏の「プログラムノート」を参照すると、「この作品の「森」は僕が想像する森で、そこには僕の好きな音のみをさえずる鳥、虫がいて、僕の鼻もつまらないし、寒くもなく、暑くもなく、心地のいい場所なのです...と騒々しいロンドンの家でこの作品を書きました」¹²と書かれている。番組内では約 1 分の短いシーンだが、上記の「仕掛け」が一目でわかるように編集されており、映像から「仕掛け」を学んだ後に、音楽だけを鑑賞したところ、複数の生徒に興味深い反応や発言が見られた。



図 3 《Secret Forest》の仕掛け

3 シーン目は、「現代音楽」とはどのような音楽なのかを紹介する一例として、ジョン・ケージの《4分 33 秒》(オーケストラ版) が解説される約 1 分の場面である。《4分 33 秒》は 1952 年 8 月 29 日に米国のマキャベリ・ホールで初演された。ステージには 1 台のピアノが置かれ、ピアニストが譜面をもって登場するとピアノの前に座り、タイマーを押す。「演奏」中は楽譜をめくったり蓋を開け閉めするのだが、鍵盤には触れない。

「ホール内のドアは森へと開け放たれ、第 1 楽章では風にそよぐ木の葉の音が、第 2 楽章では屋根を打つ雨の音が、第 3 楽章になると、この場の状況が理解できぬ聴衆のヒソヒソ話やクスクス笑いが聞こえるだけだった」¹³という。そして「演奏」を終えたピアニストが再び舞台袖に退場するまでの 4 分 33 秒間、ピアノはついに 1 音も鳴らなかったのである。だが、楽譜は存在し、

そこには「休み」を意味する音楽用語である「TACET」だけが書かれている。なお、曲名は演奏時間が4分33秒であることが由来になっている。

藤倉氏の作品ではなく、約60年前の作品を補助教材として選んだ理由は、《4分33秒》が20世紀の「現代音楽」の中でも特に物議をかもした革命的な作品、すなわち、音楽というものは意図された響きから成っている「音」と、環境の中でおのずと生じる「沈黙」（意図されていない音）とが連続して響いている時間の芸術であることを明示した作品だからである。¹⁴《4分33秒》を通して、生徒には音楽を「きく」という行為が演奏されている音だけを聴いているのではなく、その周囲の意図されていない音全体を含めて聞いている、ということに気づかせたい。そして、自由と制約から成る作曲という営みや音楽の多様性を伝えるきっかけとしたい。¹⁵

4シーン目は、米国の名門シカゴ交響楽団（CSO）から「任意の6名の奏者のための室内楽作品」として委嘱された新作《Mirrors》（2009）の作曲過程を追った場面である。作曲は「鏡写し」という全体の軸となるアイデア（図4、5、6）をスケッチブックに書くところから始まり、最終的には13分を超える6台のCelloのための作品が完成した。藤倉氏の「プログラムノート」では次のように解説されている。「《Mirrors》の冒頭では、ピチカート（※筆者註：指で弦をはじいて演奏する弦楽器の奏法）の音と、ピチカートの音の逆回しのようなアルコ（弓で弾く音）の持続音とが交互にあらわれるのを、シンプルかつ明確に聞くことができるでしょう。こうした逆回しのような音の効果は鏡のようですが、動作だけでなく和声もやはり鏡のようになっています。それがこの曲のタイトルの由来です」。¹⁶この作品は現代を代表する作曲家であり指揮者のピエール・ブーレーズ（1925-）の85歳の誕生日に捧げられ、初演時にはブーレーズ本人も立ち合い、演奏場面から終演後に楽屋で藤倉氏と会話を交わすシーンまでが取材されている。

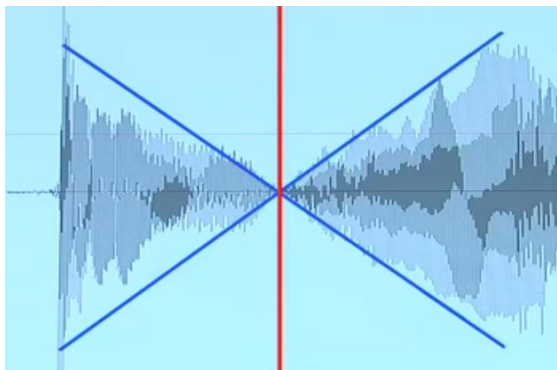


図4 ピチカートとアルコの波形



図5 ♯を中心に左右対称になるよう和音をつくる



図6 「鏡写し」が見られるスコアの一部

この他にも、SNSを通じて藤倉氏から伺った番組の取材に関する裏話や、作曲過程のエピソードなども補足説明として授業で紹介することにした。例えば、約25分の番組を制作するための取材期間が8ヶ月、4ヶ国にも及んだという話。《Mirrors》のアイデアを思い付いた時、Celloが弾けないという藤倉氏の代わりに試奏していた人物が、実は番組の監督であり、あのシーンは藤倉氏自身がカメラを回していたという話。作曲と気分転換になるという料理に共通すること（図7）。作曲という営みについて（図8、9）などである。



図7 Reply②

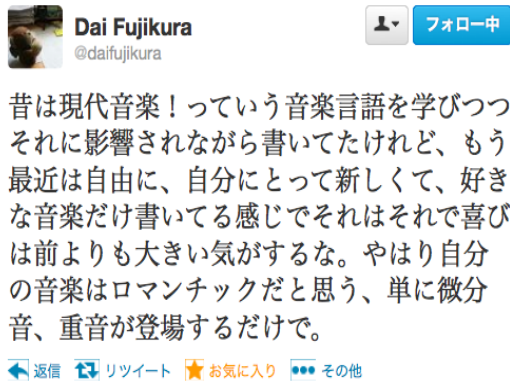


図 8 Reply③

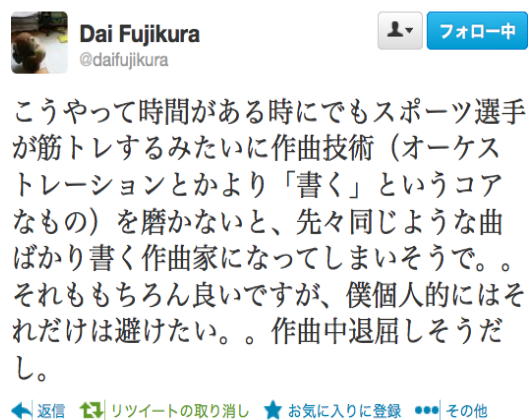


図 9 Reply④

授業では、適宜これらのエピソードを補足説明として生徒に伝えた。そのことで、後述するように現代音楽や作曲のプロセス、そして作曲家自身に対する生徒の興味や関心を高めながら、授業を展開することができた。

3.2. アンケート調査

教材研究の目的が立った頃に、本授業を最初に実施しようと考えていた第2学年の生徒を対象にアンケート調査を実施した。約140人の中から1クラス分の人数(35人)をランダムに選び、好んで聴取している音楽や、20世紀末に生まれた生徒たちの作曲家に対するイメージなど、実態を把握するための情報を収集した。

表1 事前アンケートの設問と結果

設問1) 音楽の授業以外では、どのような音楽を聴いていますか？(項目指定 | 複数回答)

ポップス : 50 映画・ゲーム : 40 ロック : 17
現代音楽 : 15 自然音 : 12 電子音 : 12
吹奏楽 : 11 洋楽 : 10 ジャズ : 8

設問2) 「作曲家」ときいて、どのようなイメージや人物が浮かびますか？

【イメージ】

おじさん、おじいさん、ヒゲが生えている、厳格そう、気難しそう、音の受け取り方が人とは違う、白髪、才能を活かしている人

【人物】

ベートーヴェン、モーツァルト、シューベルト、バッハ、滝廉太郎、山田耕筰、坂本龍一、飯島淳

設問3) 「作曲」をしてみたいですか？

【はい】17人

【いいえ】18人

設問4) 「情熱大陸」というテレビ番組を知っていますか？

【見たことがある】7人

【知っている】20人

【知らない】8人

アンケートからは生徒の興味深い実態が見て取れた。設問1)では、【ポップス】と【映画・ゲーム】が多数票になることは予測通りであった。【現代音楽】も意外に多かったが、数人の生徒が「現代音楽は何を指すのか？」と会話をしており、生徒がどのような音楽を「現代音楽」として認識しているのか興味が湧いた。数票差で【自然音】が続き、前期の授業で取り組んだ「STOMP」や「音響風景づくり」の影響を感じた。設問2)では、これまでに授業で扱った作曲家が大半で、それに伴ったステレオタイプなイメージが目立った。設問3)では、予想よりも「作曲」に興味関心のある生徒がいた。授業を通して、創作活動をより身近に感じてもらえるような工夫をしたい。なお設問4)は教材選択の参考になった。

4. 授業の実践と考察

本節では、授業中の生徒の発言や、鑑賞している様子、ワークシートの記述から、表2(本授業の構成)に記した6つの展開に沿って、授業を考察する。また、図10と図11は授業で使用した2枚のワークシートである。

表2 授業の構成(1時間扱い)

【 】 学習内容 ◇ 学習効果 ・ 留意点など

ねらい：現代の純音楽ならびに作曲家についての興味関心を高め、音楽の多様性に気づきながら、生徒の音楽に対する捉え方(音楽観)を拡張する。

- 1 【「現代(の)音楽」ときいて連想することを書き出す】
◇授業を受ける前と後のイメージを比較できる。
・どのような意見も間違いではないことを伝える。
・ワークシート①【質問1】を記入する。
- 2 【『情熱大陸』の冒頭シーン「拾ってきたピアノ」を視聴する】
◇作曲家に対する新たなイメージを感じ取ることができる。
・作曲家、藤倉大についての第一印象をメモさせる。
・適宜、導入として準備した補足資料を活用する。
- 3 【2シーン目《Secret Forest》を鑑賞する】
◇現代音楽の特徴である様々な「仕掛け」について学ぶ。
◇音楽から情景や色彩などを自由に想像する能力を育む。
・前期の授業で実施した「音響風景づくり」との関連を話す。
- 4 【3シーン目《4分33秒》の解説を視聴し意図を探る】
◇音楽の自由さ多様性、また作曲の制約について学ぶ。
◇楽音以外の「音／響き」に対する興味関心を高める。
・解説は最小限に留め、生徒自身が考える時間をつくる。
・ワークシート②を記入する
- 5 【4シーン目《Mirrors》を視聴し作曲の過程を学ぶ】
◇音楽がどのような過程を経て作曲されるのか。また、作曲家の仕事や私生活を知る。
・適宜、映像を止めて補助説明を加える。
- 6 【ワークシート①②を仕上げ、感想や質問を記述する】
・ワークシート①【質問2】の藤倉氏の考えは最後に紹介する。
・【質問3】に藤倉氏に伺いたいことを書いても良いと伝える。

4.1. 授業の考察

1 【「現代(の)音楽」ときいて連想すること】

ワークシート① (図10)【質問1】において、「現代(の)音楽」と聞いて思い浮かぶことは？」と問いかけた。この質問は、事前アンケートに回答していた生徒の「現代音楽とは何を指すのか？」という会話を受けて設定したものであり、回答は十人十色であった。具体的な楽曲を書いた生徒もあれば、J-Popやロックなど、いわゆる音楽のジャンルを書いていた生徒も多かった。想定していなかったのは「ボーカロイド (初音ミク) ¹⁷⁾ の音楽」という回答が多数みられたことである。確かに「ボーカロイド」は21世紀に発明された音楽制作ソフトであり、興味深い意見だった。また、「楽器ではないものを楽器として使っている音楽」「今、つくられている音楽」という記述も複数みられ、本授業の内容に沿った意見もみられた。

音楽科ワークシート

年 組 番 氏名

【鑑賞】現代音楽から探る音楽の諸要素と本質

【質問1】

Q: 「現代(の)音楽」と聞いて思い浮かぶことを自由に書いて下さい。

◇ 本日のガイド【作曲家：藤倉大】(TBS『情熱大陸』2010年2月21日放送回)



1977年大阪生まれ。15歳で単身英国に渡り、エドウィン・ロックスバラ、ダリル・ランズウィック、ジョージ・ベンジャミンに師事した。これまでイギリスのハダースフィールド国際音楽祭作曲家賞、ロイヤル・フィルハーモニック作曲賞、オーストリアの国際ウィーン作曲賞、ドイツのパウル・ヘンデミット賞、2009年の第57回尾高賞および第19回芥川作曲賞をはじめ、数々の著名な作曲賞を受賞している。

【質問2】下の言葉に合うように、内に自分の考えを書いて下さい。

「すべての音楽は、だった」

<藤倉さんの考え>

「すべての音楽は、だった」

【質問3】今日の授業で感じたこと、印象に残ったことを自由に書いて下さい。

本日の授業評価【 とても興味をもてた 普通だった 良くわからなかった 】
名前を確認して、授業の最後に提出して下さい。

図10 ワークシート①【作曲家：藤倉大】

2 【『情熱大陸』の冒頭シーン「拾ってきたピアノ」】

番組が始まってすぐのシーンだからか、生徒は真剣な表情で見ていた。しかし、「道端でピアノを拾ってきた(2万円で購入)」という藤倉氏の発言には思わず表情が緩んでいた。ワークシートの自由表記欄にも「弦が切れている狂ったピアノなのに作曲できてすごい。楽器の良し悪しとは関係ないと思った。」という感想がみられた。また、補足説明(図2 Reply①)をしたところ、■「作曲家はすごいお金持ちだと思っていたから驚きました」という発言がきかれた。

3 【2シーン目《Secret Forest》を鑑賞する】

番組における《Secret Forest》の解説シーンは1分程度だが、生徒たちは演奏者が客席内にもいることに驚きを感じていた。また、レインスティックが登場すると、前期に実施した「音響風景づくり」で使用した楽器のためか、■「懐かしい」という発言もきかれた。

続けて3-1.(図3)で先述した作品の「仕掛け」を伝え、まずは音源だけを鑑賞した。すると、複数の生徒が目閉じて聴き出したのである。これは、これまでの鑑賞授業では見られなかった「変化」であった。おそらく、きこえてくる「演奏≒音響」に集中し、内なる心象

風景を紡ぎあげていたのだろう。この作品は中学生からすれば、明らかに「わからない」音楽である。しかし、わからないからこそ「理解／判断」ではなく「感受」に重きが置かれることになる。この点については、認知心理学者で「学び」について造詣の深い佐伯胖も次のように述べている。

「(略)「音楽がわかる」ということは、音楽によって自分の中から豊かなものが生まれてくることであって、受け止めることではないということです。ああ、こういうことだったのかということが、正しいとか真理なんだというのではなく、気持ちが沸き起こってくることによって新しい世界が広がるとか、今までの自分とは何かが変わった感じがするという、非常に創造的な活動だと思います」¹⁸。

4【3シーン目《4分 33秒》の解説を視聴し意図を探る】

ワークシート②(図 11)の「メモ・感想欄」の意見を分析すると、《4分 33秒》を教材として取り上げる意義を感じることができた。

音楽科ワークシート②

年 組 番 氏 名

『 』の音楽 ～ どこまでを音楽と呼ぶのか?

【曲 名: 】【初 演 日: 1952 年 8 月 29 日】【作曲 者: ジョン・ケージ (1912-1992)】

※楽譜に唯一書かれている「TACET」とは?
【読み方: 】【意 味: 】【メモ・感想】

図 11 ワークシート②【《4分 33秒》について】

■「《4分 33秒》という曲は、すべて休みからできているなんて、面白い！もっと世界中の音楽を聴いてみたいと思った。」■「音楽は自由にやっているとわかった。」という肯定的な意見があれば、■「これは音楽ではないと思う。」■「音楽の「楽」がなかった。」■「仕掛けは面白いけど、聴いている方はつらいと思った。」という否定的な意見もみられた。また、ただ一言■「TACET」とだけ書かれた秀逸なものもあり、あらためて《4分 33秒》という作品は、私たちに「どこまでが音楽か？」という根源的なテーマを問いかける「音楽」であることを実感した。同時に、音楽の自由さと制約の必要性を生徒に気づかせるために適した教材であることを確かめることもできた。

5【4シーン目《Mirrors》を視聴し作曲の過程を学ぶ】

「初めて作曲の現場を見た人？」と質問をしたところ、ほとんどの生徒が挙手をした。ワークシートをみると、多くの生徒は作曲に興味がなかったわけではなく、作曲がどのような行為であるかを知らなかったことがわかった。以下、生徒の意見や感想をいくつか紹介したい。

■「藤倉さんの音楽は生物みたいに感じた。授業で《Mirrors》が少しずつ作られていく過程を見ることができたので、音楽がとても印象に残っている。」
■「鏡写しというアイディアで書かれた楽譜が少しずつ音楽になっていくのが面白かった。」
■「作曲家はすごいと思った。地味な作業の積み重ねなのですね。」
■「作曲家がかっこいいと感じた。音楽の世界は自由で面白い。」

また、中学校ではなかなか扱われない Cello の奏法についての感想もみられた。

■「チェロは弓で弾くイメージしかなかったけど、指でバチバチはじく弾き方があることを初めて知った。」

また、「わからない」という意見もみられたが、感想を読むと否定的に捉えられてはいなかった。

■「わからないけど、すごい音楽。自分なりの音楽。でもやっぱりわからない。」
■「あまりよくわかりませんでした。だけど、作曲の様子はすごいと思いました。」

その他にも、藤倉氏から SNS を通じて伺った補足説明(3-1.)を随所で紹介したからか、■「藤倉さんと先生のやりとりがいい感じで、わからない音楽だったけど難しくは感じませんでした。」という感想もあった。

6【ワークシート①②を仕上げ、感想や質問を記述する】

どの生徒も自由表記欄にはたくさんの感想や意見、また質問を書いてくれた。それらを読むと、以下のように作曲家である藤倉氏本人に対するものが多くみられた。

■「藤倉さんはとてもユニークな人で面白かったです。作曲するのは大変そうだったけれど、今まで聞いたことのない音楽でしたが、自然に聞けました。」
■「藤倉さんって、なんだか不思議な人だと思いました。でも、そんな不思議な感じが藤倉氏さんの曲からも感じられました。蛙の子は蛙だって言いますが、音楽も作る人の個性が出るのですね。」
■「ごちゃごちゃ色々な音が混ざっていただけのように聞こえたけれど、私はメロディがわかりやすい曲よりも、今日聞いた曲の方が好きです。」
■「ジョン・ケージさんの《4分 33秒》は、ずーっと沈黙だけの音楽だったのは凄いと思いました。昔作られた音楽はすべて、今では昔の音楽になったから、藤倉さ

んの音楽がいつクラシックになるのか楽しみです。」

■「また、すごい人を1人知ることができた。テレビを使った説明でわかりやすいし、見やすかった。」

4.2. 学習を通じた音楽観の拡張

ワークシート①【質問2】では、「すべての音楽は、○○○だった」という自由に考える問いかけを用意した。番組内でも紹介される「現代音楽」に対する藤倉氏の考えを模範解答として用意しつつ、生徒には自分の考えを書いてもらおうと、想定していなかった抽象的かつ独創的な考えがいくつもみられた。

「コミュニケーション」「自然の音」「耳に入る音すべて」「自然の音から始まったもの」「人の心を動かすもの」「世の中の音」「音と響き」「雑音」「自由」「沈黙」「沈黙から生まれたもの」「感情」「自分そのもの」「芸術」「作曲家の趣味」「自分の意思を伝え合う手段」「地球」「世界共通の文化」など。

これは生徒の中で「音楽」の捉え方（音楽観）が拡張した結果であると考えられる。なお、模範解答とした藤倉氏の考えは、「すべての音楽は、その時の『現代音楽』だった」というものである。この考えは、『情熱大陸』の冒頭部（ナレーション）においても、ベートーヴェンの有名な《交響曲第9番ニ短調 作品125 合唱付》（第9）が、発表当時は演奏不可能だと言われていたことなどが説明されている。また、番組の途中でも藤倉氏自身がインタビューに答えるかたちで語っている。

最後に、ワークシート①の最下部には【本日の授業評価】という項目を設けた。生徒に【とても興味をもてた | 普通だった | 良くわからなかった】という3段階で授業評価をしてもらったのだが、意外だったのは【普通だった】に○を付けた生徒がいなかったことである。また、【良くわからなかった】に○を付けた生徒は2名いたが、自由表記欄にはびっしりと感想や書かれていた。

4.3. 更新可能な授業

ワークシートの自由表記欄には、生徒から藤倉氏に対する質問も寄せられていた。そこで、FacebookのMessages機能を利用して質問をしたところ、藤倉氏の作曲に向かう意識や姿勢、人柄が表れている回答が送られてきた。そのうちのひとつを紹介したい。

Q 質問:「趣味がDVD鑑賞ということで壁一面にDVDが積まれているシーンを見て驚きました。もし、映画を観ているときに「音楽」が浮かんたら、中断して作曲に取りかかるのでしょうか？」

A 回答:「うーん、というか音楽のことは始終考えているので、テレビ観てぼーっとしていたら知らない間に気がついたら机に向かって作曲していた、という感じですね。だから周りの者は大変迷惑だそうです。赤ちゃんの面倒を見ていたと思ったら、気がついたら作業している（赤ちゃんは同じ部屋で泣き叫んでいるが聞こえない）とか、朝ご飯食べるとしたら作業し始めているとか。」

この回答を送っていただいた後、筆者も番組内で気になったシーンについてTwitterでコメントを送った。そのシーンでは、藤倉氏が13歳（中学生）の時に作曲したというピアノ曲を披露しており、生徒と同じくらいの年齢の時に、どのようなことを考えて作曲していたのか。また、今から中学生の頃を振り返って、何か思うことはあるかを知りたかったのである。（図12、図13）

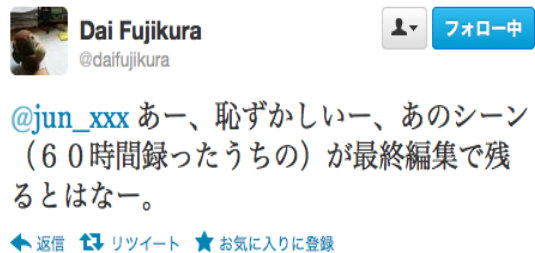
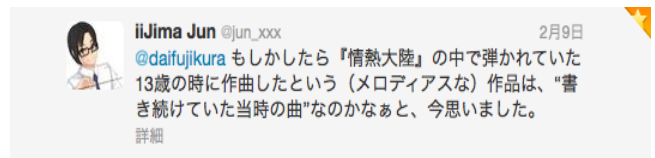


図12 Reply⑤

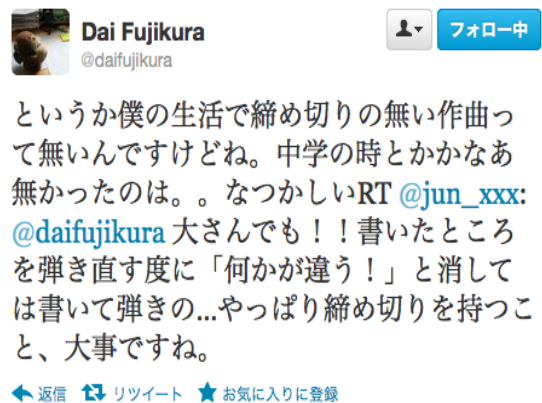


図13 Reply⑥

後日、このエピソードを生徒に伝えたところ、「自由に作曲するって意外と難しい」「自分は作曲ではないけど、打ち込めることを見つけたい」という発言があった。このように、授業を展開する中でみられた生徒の反応

や感想・質問を（間接的ではあるが）SNS を活用することによって、すぐさま作曲家本人に伝えられたことで、授業の印象や記憶が新鮮なうちに新たなフィードバックを生徒にもたらすことができた。

4.4. 今後の検討課題

ここまで、授業の 6 つの展開に沿って生徒の反応やワークシートの記述を見てきたが、作曲家や作曲過程に対する生徒の興味関心や親しみが高いことがわかった。これは SNS を活用して作曲家本人と更新可能なコミュニケーションを取りながら、音楽（作品）に付随する諸要素（特殊楽器や特殊奏法によって生まれる「多様な音響」、独特の楽器編成や配置によって演出される「見た目」、作曲技法や作曲過程の「エピソード」）までを含めて鑑賞した成果だと考えられる。

しかしながら、新しい取り組みだけに、今後検討すべき課題も見えてきた。

第 1 に、本授業はどこでも実施可能な授業とは言えないことである。この点については本授業を校内研究会において実施した際に、講師の指導主事からも、義務教育における教科教育という認識を持つようにとの指摘を受けた。また、生徒の興味関心が「音楽の鑑賞」ということから離れてしまわないよう、授業展開を工夫することも必要だと感じた。

第 2 に、中学校の授業で積極的にインターネットを活用することに対して、十分なメディアリテラシー教育を行わずに、実施してしまったことである。Twitter や Facebook は非常に便利なツールであるが、その一方で、なりすましや匿名性を悪用した誹謗中傷といった様々なリスクがあることも事前に伝える必要があった。

5. おわりに

インターネットのインフラ整備が世界的に進み、小学生の 4 人に 1 人が PC に加えてスマートフォンやケータイといった情報端末機器を所持するようになった。¹⁹ インターネットと携帯型の情報端末機器の普及は、人々の音楽に対する価値観や聴取のあり方を大きく変化させた。すなわち、私たちは屋内外を問わず、いつでもどこでも、極めて個人的な空間において大量の音楽を自由に「きける」ようになったのである。しかし、その弊害（代償）として、音楽の閉鎖性という問題が表出している。散歩や登山をしながら、イヤフォンをして音楽を聴いている人々、また、海水浴場やスキー場では大音量で流行の音楽が絶えずきこえているなど、その事例は枚挙にいとまがない。当人の自覚の有無にかかわらず、商用音楽が「当たり前」という意識や感覚が蔓延してしまう状況は無視できない。とりわけ子ども達にとっては、学

校の音楽科教育の内容と、社会や実生活での音楽の捉え方、関わり方との間に深刻な乖離が生じているのではないかと予想していた。実際にこの予想は、中学校の教育現場に出る機会を得たことで、確信に変わった。

音楽は「自由」にする（きく）ものであるが、作曲や演奏（あるいは聴取）の過程において「制約」を課すことによって、筆舌に尽くしがたい作品や演奏そして感動が生まれることを、筆者は藤倉氏と氏の音楽から学んだ。だからこそ、感受性の高い子どもの時期にはもちろん、大人になってからも、多種多様な音楽や音響に耳を澄ます時間と場（機会）を見つけ、自分自身が「よい」と感じる響きや音楽に出会い続けてほしい。なぜなら「耳を澄ます」とは、自分自身の周囲で今どのような音が生じているかを感受し、その音を自分自身がどう感じているのかを「判断」する営みだからである。²⁰

この地球上で「音」が途切れたことは一度もなく、外界の花鳥風月そして人体（という私達自身）は、常に多種多様な響きを発する万象であふれている。私たちの遙か祖先は、それらの多種多様な響きをマテリアルにして「音楽」を紡ぎあげた。だが、21 世紀の今日においては、音だけでなく音楽までもが洪水の如くあふれている。このような社会（環境）だからこそ、子ども（生徒）だけでなく大人（親や教師）も一緒になって、日常的に耳を澄まし、自分の感性に合う響きを自発的に探せる「耳」を育てる機会（時間と場所）が必要だと強く感じている。一介の教育者として、音楽や音響それ自体の魅力を生かした「耳を開く」音楽教育プログラムの研究と開発、そしてワークショップをはじめとした実践活動に、今後も尽力したい。

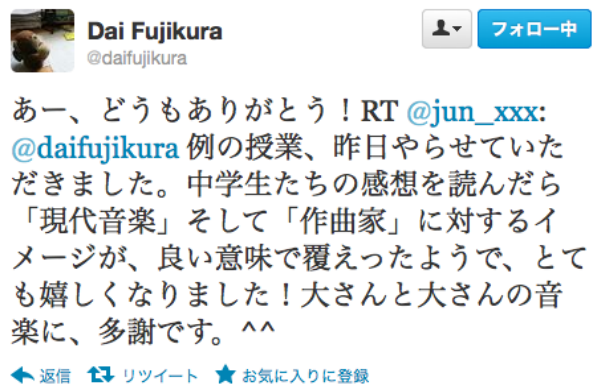


図 14 Reply⑦：藤倉氏への報告とお礼

¹ サウンドスケープ (Soundscape) は 1960 年代にカナダの作曲家のマリー・シェーファー (1933-) によって提唱された理論。「音響風景づくり」は、人々にもう一度「聴き方」を学び直すことの大切さを教育することなどを目的としたサウンド・エデュケーション (Sound Education) のひとつ。

² 純音楽は「芸術音楽」とも呼ばれ、その定義には諸説ある。

本論では、「楽器編成やエクリチュール（記譜法）など、主にヨーロッパの古典音楽（クラシック）の技法を駆使して作曲された弦楽やオーケストラのための作品」と定義し、ポップス、映画、テレビ、CMなどの「実用（商用）音楽」と区別した。

³ たとえば、ヴィヴァルディの《春》やシューベルトの《魔王》（第1学年）、バッハの《小フーガ短調》やベートーヴェンの《交響曲第5番ハ短調～運命》（第2学年）、ラヴェルの《ボレロ》やヴェルディの《アイーダ》（第3学年）など。これらの作品は音楽史上の名曲であり、中学生の発達段階が考慮されて選定された教材である。しかし、諸民族の音楽だけをみても世界には多種多様な音楽が存在する。西洋音楽は音楽全体の一部に過ぎないが、全体を俯瞰せずにごく一部の時代しか取り上げられない状況は無視できない。

⁴ 米国の名門ニューヨーク・フィルハーモニックの創立125周年作品として日本人作曲家の武満徹（1930-1996）に委嘱され、西洋音楽を代表するオーケストラに東洋楽器である琵琶と尺八が取り入れられたことでも話題となった。

⁵ たとえば、中学校音楽科の副読本である『音楽一表現と鑑賞の資料（改定パノラマワイド版）』正進社 p.71、『音楽鑑賞資料集』正進社 p.52 など。

⁶ ケージは作曲の方法として、中国の「易」を利用したり、五線紙上にある染を音符に見立てるといった手法を用いたことから「偶然性の音楽」（*Chance Operation*）と呼ばれている。

⁷ 島崎篤子（1993）『音楽づくりで楽しもう！』日本書籍、坪内由紀子（1995）『音楽づくりのアイデア』音楽之友社、菅野道夫（2006）「現代音楽を利用した創造的音楽づくりの一事例：「偶然性の音楽」を楽しもう」学校音楽教育研究：日本学校音楽教育研究会紀要 10, pp.74-75

⁸ 森下修次 他（2007）「ジョン・ケージ作品の指導：中学校音楽科授業における現代音楽の展望」新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要（2007年第6号）p.83

⁹ 藤倉大（ふじくらだい）1977年大阪生まれ。英国在住の作曲家。これまでに、ハーダースフィールド国際音楽祭作曲家賞、ロイヤル・フィルハーモニック作曲賞、国際ウィーン作曲賞、パウル・ヒンデミット賞、第57回尾高賞、第19回芥川作曲賞などを受賞。今や世界中のオーケストラや演奏家から新作を委嘱され続けている国際的な作曲家である。また、2012年10月には「サントリーホール」で個展コンサートを開催。2013年4月には、音楽家の坂本龍一氏と共同作曲した電子音楽作品《パリアフェラル・ムーヴメント》の初演が予定されている。

【web site】<http://www.dai-fujikura.com/>

¹⁰ <http://www.cdjournal.com/main/cdjpsh/fujikura-dai/2000000670>（最終閲覧日：2013年1月11日）

¹¹ 季刊「真夜中 No.11 2010 Early Winter」リトルモアブック스에掲載されたインタビューでも述べている。P.29

¹² http://www.dai-fujikura.com/un/lw_secretforest.html（最終閲覧日：2013年1月11日）

¹³ ロナルド・タムブリン 編（1993）多木浩二 監訳『20世紀の歴史 第12巻 芸術（下）』平凡社 p.27

¹⁴ この作品によって、ケージは聴衆の耳のフィルターを外そうとした。すなわち、作曲とはこれらの連続性をコントロールし統合する手段であるという原点を示し、従来までの音楽の「常識」を問い直した。

¹⁵ 「私が考えているような音楽は環境的です。さらに進んで音楽が環境だと言うこともできるでしょう。」ジョン・ケージ（1982）青山マミ 訳『小鳥たちのために』青土社

¹⁶ http://www.dai-fujikura.com/un/lw_Mirrors.html（最終閲覧日：2013年1月11日）

¹⁷ 発売元のクリプトン・フューチャー・メディア代表取締役社長伊藤博之氏（2008年2月26日更新）が詳しい。

<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0802/21/news015.html>（最終閲覧日：2013年1月11日）

¹⁸ 教育芸術社 編「音楽教育 ヴァン Vol.19」p.7

¹⁹ 文部科学省（2009）「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」によると、子どものケータイの所持状況は、小学6年生で24.7%、中学2年生で45.9%、高校2年生で95.9%である。

²⁰ 「この曲は歴史的にはこういう位置にあつて、ここが面白い、と何でもまず定義づけないと安心できないひとがいる。また、ほとんどの音楽批評は音楽に意味を与えることに終始している。こうなると、ものを自分なりにただ聞くことができない。すでに知識としてもっている意味を聞いているだけで、音楽自体は記憶をたすける小道具になってしまう」。高橋悠治（1974）『ことばをもって音をたちきれ』晶文社 p.145

<謝辞>

本論の執筆、授業の開発と実践に際して、作曲家の藤倉大氏のご厚意には感謝の表しがありません。作曲、取材、育児、レコーディングと多忙を極める中でも、いつも率直に質問に答えてくださいました。藤倉氏と氏の音楽と出会えたことに、心から感謝いたします。

研究室紀要「授業実践開発研究」ISSN 1884-8818

第六巻 2013年3月

- | | |
|---------------------|---|
| 藤川大祐 | <u>授業における「ランダム性」に関する考察</u> |
| 小池翔太
福嶋俊
藤川大祐 | <u>デジタル時代の働き方に着目した
教員養成学部における「キャリア教育」の試み</u> |
| 陳 卓君 | <u>中国の重慶における国際交流の授業開発
—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—</u> |
| 小林 溪太
塩田 真吾 | <u>中学校技術科における知的財産権教育に関する研究
—携帯電話を題材とした授業の開発・実践とその評価—</u> |
| 阿部 学 | <u>情報モラル教育としての「道徳」授業批判
—「資料」の解釈について—</u> |
| 飯島 淳 | <u>「現代(の)音楽」に親しむ鑑賞授業の開発と実践
—SNSを活用した作曲家とのコミュニケーションを扱って—</u> |
| 安藤 智英美 | <u>協力するための技能を学ぶ学級指導の開発
—ソーシャルスキルトレーニングを用いて—</u> |
| 古谷 成司 | <u>熱中症や高血圧を予防する塩分摂取のあり方を
理解させる授業プログラムの開発</u> |

<http://ace-npo.org/fujikawa-lab/bulletin.html>

授業実践開発研究 第6巻

2013年3月 発行

編集発行 千葉大学教育学部 授業実践開発研究室（藤川大祐研究室）

〒263-8522

千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学教育学部藤川研究室内

電話 043-290-2564

FAX 020-4666-7825